

# 國語讀本

高等學校用

卷六

福岡第一師範學校  
(學校圖書)

登錄番	第	號
社會科學部		
教育		
教授法	款	國語
目		次
全	冊ノ内第	冊
分類番	第	號

372.88

24587

T1A3

10

Ts21

47906

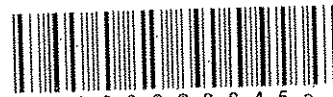
日十三月二十年三十三清明  
書科教用童兒科語國校學小等高  
濟定檢省部文

文學博士坪内雄藏著

國語讀本  
高等小學校用  
卷六

東京  
合資  
會社  
富山房藏版

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 8 8 4 6 a

福岡教育大学蔵書

# 卷六 目次

第一課	天然物の利用	一
第二課	蒸汽機關の發明	二
第三課	親とこゝろ(上)	五
第四課	同 (下)	八
第五課	海流	十一
第六課	大鳴門	十四
第七課	手	十六
第八課	狩野元信	十八
第九課	漆料	二十
第十課	領主の新衣(上)	二十一
第十一課	同 (下)	二十四
第十二課	羽衣	二十七

第十三課	曲亭馬琴	三十
第十四課	短篇一束 <small>傳説 書 場 九</small>	三十二
第十五課	火山	三十四
第十六課	霧島山	三十六
第十七課	五帶と生物	三十八
第十八課	奇異なる植物	四十一
第十九課	輕氣球	四十三
第二十課	少年鼓手(上)	四十六
第二十一課	同 (下)	四十八
第二十二課	日射	五十一
第二十三課	新羅三郎	五十三
第二十四課	露宿梅	五十五

## 國語讀本 高等小學校用 卷六

### 第一課 天然物の利用

惱 米 米 米

人智開ケザリシ頃ニハ、人ハ、常ニ、天然ニ役セラレキ。或ハ、寒暑、風雨ニ役セラレ、或ハ、毒蛇、猛獸ニ惱マサレキ。人智進ムニ及ビテハ、人、却リテ、天然ヲ使役シ、天地間ノ萬物ヲ、殆ド悉ク、オノガ利用ニ供セリ。天然物ノ利用ハ、實ニ、開化ノ根本ナリ。凡ソ、天地間ノ物ハ、之レヲ用フルノ法、宜

炭

シキヲ得レバ、人間ヲ裨益セザルモノ稀ナリ。木綿ヤ、羊毛ヤ、之レヲ用ヒテ、衣服トナセバ、以テ、寒暑ヲ凌グベク、五穀ヤ、鳥獸ヤ、魚介ヤ、之レヲ調理シテ、食トナセバ、以テ、心身ヲ滋養スベシ。松、杉、檜、樺ナドノ、家屋、建築ニ利用セラル、亦タ、同様ノ例ナリ。

苟

手近クハ、動物、植物、礦物等ノ利用ヨリ、ヤ、進ミテハ、風、水、電氣ナドノ利用ニイタルマデ、今日、苟モ、人間ヲ益スルノ工夫ハ、一トシテ、天然物ノ利用ニ基カザルハナシ。此

※

等ハ、皆、幾百年ノ經驗、觀察ノ結果トシテ、漸々ニ工夫シ出ダサレシナリ。人ガ、次第ニ、生活ノ程度ヲ高メテ、遂ニ、萬物ノ長ヲ以テ、自ラ居ルニ至リシハ、主トシテ、天然物利用ノ結果ナリ。

思フニ、人智益進ミテ、利用ノ道亦タ、益開クルニ及バ、天地間ノ萬物、一トシテ、人ヲ裨益セザル物ナキニ至ランモ、知ルベカラズ。新智識ヲ得ント欲スル人慾ニハ、限リナシ。自ラ足レリトスル慢心ダニナクバ、

機  
関

※ ※ ※

人智ハ、限リナク發達スベク、隨ウテ、天然ヲ  
利用スルノ工夫モ亦タ、窮リナキヲ得ベシ。  
私利、私益ノミニ關スルコトハ、常ニ、其ノ  
慾ヲ限ルベク、メイ／＼ノ分ニ安ンズベシ。  
公利、公益ニ關スルコトハ、決シテ、足ルヲ知  
ルコトナク、進歩ヲ限ルコトナカルベキナ  
リ。ハテシナク改善スベク、ハテシナク擴  
張スベク、ハテシナク發達セシムベキナリ。

## 第二課 蒸氣機關の發明

爐

鍋  
子

蒸氣は、湯氣なり。茶釜、鐵瓶などの煮え  
たちたる時、其の口より吹き出で、又は、立ち  
のぼるもの、是れなり。されば、其の性質も、  
働きも、早くより、心づかれたりし筈なれど  
も、其の、深く取り調べられて、利用の方法の  
工夫せられしは、割合に近世の事なり。

今より二百年ほど以前、英國の貴族に、ウ  
ースター侯といふ人あり、故ありて、獄に下  
され、或夜、退屈なるまゝ、獄中の爐にかけた  
る鍋子の煮えたつを打ちまもり、居たりし。

に、湯氣は、頻りに、罐子の蓋を吹きあげ、終には、其の口より迸りいでたり。侯、之れを見て、始めて、蒸氣力の大きなことに思ひ到り思へらく、若し、此の蓋をしばりつけ、此の口を塞ぎ止めば、如何。恐らくは、罐子破裂するに至るべし。果して然らば、湯氣の力は、強大なるものなり。試に、此の水の分量を、數百倍にし、此の火の力をも、數百倍にせば、如何。と。

かくて、長き間の試験と工夫とによりて、

唧筒

侯は、遂に、一種の新機械を製作しき。それは、蒸氣の膨張力を利用して、水を引きあげ、高さ四十尺に及ばしむる唧筒なりき。

さもあれ、ウースター侯の發明は、尚ほ、甚だ不完全なるものなりき。今、行はるゝ如き蒸氣機關の作らるゝに至りしは、ワット出でて後ちの事なり。

ワットは、英國蘇格蘭スコットランドの人にて、名をチームスといひ、西洋紀元一千七百卅七年に生れき。幼時、身軀虚弱なりしかば、學校に通ふ

※ 怜惻  
匠 機械

こと叶はず、家庭の教育のみ受けたりしが、天性怜惻にして、物理の考索を好みたりき。十八歳の頃、倫敦に出でて、或機械匠の家に寄寓せしが、病の故に、歸郷し、後ち、更に、グラスゴーに出でて、自ら、一の機械商店を開きぬ。やがて、經濟學者アダム、スミスと、知人になり、其の紹介にて、グラスゴー大學の出入となり、後ち、程なく、教授某のいひつけにて、蒸氣機關の雛形を修繕することゝなり、偶然にも、大發明の端は開かれたり。

※  
※

ワットは、件の雛形の構造を取り調べて、一度は、其の巧妙なるに驚きしが、精査するにつれて、若干の缺典を發見し、日夜、其の改善に、心を傾け、殆ど、眠食をも忘れんとせりき。かくて、焦慮苦心の末、終に、驚くべき新蒸氣機關を工夫し出だすに至りたり。其の機關の組織は、簡略には説きあかし難し。今日、百般の製造事業、運輸事業等に應用せらるゝ蒸氣の機關は、すべて、此の發明に負ふところ多く、且つ大なり。これによりて

も、ワットが工夫の巧妙なると、其の功勞の大  
なるとを推すべし。

第三課 親ごころ（上）

神戸から北海道函館へ向けて、出帆した  
汽船某丸が、志摩の沖あひを走つてゐる頃、  
甲板に集。た上中下の乗客の中で、目に立。た  
は、年四十一二の婦人、身分ある人の妻女ら  
しく、甲板に出てゐる間も、老女と小間使と  
が、そばを離れぬ。金の指輪が、二つも、三つ

も、左右の手の指に光。てゐるといふので、其  
の身なりの立派さを推察するがよい。

それと照り合せて、一しほ見すほらしう  
見えたは、七つ位を頭に、子供を、三人までつ  
れた、四十前後の男。子供等は、三人とも、醜  
くからぬ顔だちなれど、身なりは、甚だ粗末  
であつた。

婦人は、何か、思はくがありげに、親子の者  
の様子を、餘所ながらながめゐたが、何事か、  
老女にさゝやいた。いつとなく、老女は、親



\* 縁

子のそばへ來た。末の子が、わんぱくを言ふのをすかして、老女が、菓子にくれたのが縁となつて、互に、口をきゝ始めた。

「お子供衆が澤山で、さぞ、お樂みであらう。」と、老女がいへば、どう致しまして、此處にゐまする外に、まだ、乳のみ子がひとり。貧乏人の子澤山、とやら、子供故に、苦みまする。さりとて、捨てるにも捨てられませぬゆゑ、飢ゑ死にせぬ用心にと、親子夫婦六人づれて、根室へ、出稼ぎに参りまする。」と、問はず語り。

\*

老女は、聲をひそめ、ちと、立ち入った事ながら、今のお話が、眞實なら、承て見たいことがござりまするが。」と言ひかけて、ためらへば、それは、また、どの様なこと。」と、問ひ反へされ

老女が、改めて、語り出す話は。

\* \*

老女が、主人といふは、函館の豪商で、或大きな會社長をする人、夫婦とも、よろづに不自由のない身ながら、四十を越しても、子が無いのが、玉に瑕。男の子にまれ、女の子にまれ、親知らずで、くれる人はいか、と、年來

さがしてゐた矢先、とのこと。

「どうか、お前様の子供衆の中のひとりを、親知らずで、主人方へ下さるまいか。行末は、そのお子が、主人方の跡取。御禮としては、金子百圓あげまする筈。何と、承諾して下さるまいか。」と思ひがけぬ結構な話。男は、大いに悦び、すぐにも承諾しようかと思つたが、妻と相談の上で、兎も角も、御返事致しませう。とて、其の時は、別れた。

\*

第四課 親どころ(下)

訪

その日の夕方、汽船が、相模灘を通つてゐる頃、彼の男は、妻らしい女と一しに、七つになる長男をつれて、上等室を訪れて、何卒、この小僧をお引取り下されませ。と言ひ入れた。會社長の妻女は、大悦びで、その子を受取り、早速、老女にいひつけて、用意の着物を着せるやら、湯をつかはせるやら、騒ぎであつた。貧乏人夫婦は、百圓といふ大金を貰ひ、飛びたつ様に悦んだものゝ、また、親子一生の

別れかと思ふと、悲しくもあり、暫くは、そこを立ちかねてゐた。

翌日、船が房總半島を回つてゐる頃、きのふの男は、四歳になる次男をつれて、再び、會社の妻女を訪れた。さて、きまりわるげに言ひ出すをきけば、昨晚、改めて、考へました所、長男を、餘所へあげまして、弟を残すは、何分にも、順違ひゆゑ、どうも、長男はあげられませぬ。成らうことなら、次男と取りかへて下さりませ。といかにも、言ひにくげに言

\*

ひ入れた。

會社長の妻女は、快く承諾して、長男を、次男と引きかへた。

すると、其の日の暮れ方、今度は、母親が、三つになるのをつれて、訪れた。

「何とも、申しかねましたなれど、さしあげました次男は、目鼻立ちから聲までが、なくなつた姑に生き寫し。それゆゑ、現在の姑御を棄てる様な氣がして、どう考へても、心が濟みませぬ。結句、辨へがあるだけに、大

結句

姑御

\*

い程、ふびんがまさります。申しかねましたことなれど、此のぐんぜなしと取り換へて下さりませ。と、淀みく言ひ入れた。會社長の妻女は、親心を思ひやり、これをも、快く承諾した。

翌日の午前、船が、函館灣に近づいた頃、例のが今度は、夫婦連れで、しほくと、上等室へ、はいて來た。會社長の妻女を見るや否や、跪き物をも言はずに、泣いてゐる。仔細を尋ねても、只、面目が、ござりませぬ。

晚

※※

淀

※

※

自儘

とばかりで、泣いてゐる。幾たびも問はれて、やうく顔をあげ、此の様な自儘なことは、もはや、申されぬ筈なれど、と、前おきして、夫婦が、かはるく語るをきけば、

昨日、次男をいたゞいて歸。てからは、夫婦互に約束して、もうく、決して、未練はいふまい、ときめましたなれど、夜一夜、小さいの事が、氣にかゝって、ぼちりとも寝ませなんだ。あの様な、ぐんぜないものを、金子にかへて、人様へあげるとは、我れながら、むこい

賣

本

馬等斗主走用卷六

十

富山房藏版

免粗忽

心と思ひました。いたゞいたお金は、お返し申します。どうぞ娘をば、お戻しなされて下され。こんな思ひをするよりは、親子六人揃て、飢ゑ死にした方がましでござります。粗忽を、お免しなされて、娘をば、戻して下さりませ。」と、夫婦かはるゝ涙ながらに頼んだ。

これを聞いて、會社長の妻女は、つくづく感じ入った。他人から見ればこそ、自儘、身勝手とも思はるれ、子を思ふ親心は、げに、さう

※

※

もあらうかと、思ひやりの深い婦人ゆゑ、快く承諾して、女の子を返し、其の上、戻した金子すらも、皆は請け取らず、親子が行末の暮しの助けにと、其の中、幾らかを分けてやった。夫婦は、夢かと喜び、手を合せて、會社長の妻女を拜む時、船は、函館の港に着いた。資本が出来たゆゑ、夫婦は、根室へ行くまでもなく、函館にとゞまることゝなり、やがて、或會社へ雇はれた。それも、會社長の妻女が世話とのはなし。

# 第五課 海 流

循環

陸地を、河の流るゝ如くに、海洋の間を、一定の方向に流るゝ水あり、之れを、海流と名づく。赤道地方より、兩極に向つて流るゝは、暖流にして、赤道流と呼び、兩極地方より、赤道に向つて流るゝは、寒流にして、極流と稱す。海流は、主に、太陽熱に、原因す。暖流の、兩極に向つて流るゝは、寒流の、赤道に向つて流るゝは、譬へば、血液の、人身を循環するが如し。而

\*

して、其の方向と速度とは、地球の回轉、及び、其の他の事實に由りて、變化す。

\*

瀾大

海流の、最も壯大にして、其の名の、廣く、世に知られたるものは、灣流なり。其の流、源を、墨西哥灣に發し、フロリダ海峽を経て、北亞米利加の東海岸に出で、殆ど、之れと並行して走り、ニューファンドランドを過ぎて、漸く瀾大となり、分流の一は、歐羅巴の海岸に向ひて走り、遂に、ノールウェーと、氷洲との間を流れて、北氷洋に入りて、終る。

賣

大

萬葉和生後月卷二

十二

富山月 龍胆

東洋の海流の中にて、我が國に、少からざる影響を與ふもの二あり、一は、暖流にして、一は、寒流なり。

暖流は、南の方、臺灣の近傍より來り、琉球諸島の邊にて、本流と支流とに二分す。本流は、九州、四國、乃至、本州の沿岸を洗ひ、陸中の東邊に到り、そこにて、寒流と衝突し、急に、方向を變じて、東北に向ふものなり、之れを、日本海流と云ふ。或は、其の深藍色なるが故に、黒潮とも稱す。伊豆諸島の邊を流る

沿岸

深藍

\*

るに當りて、其の速度殊に甚し、黒瀨川の名ある所以なり。さて、支流は、九州の西岸を、北へ流れて、日本海に入り、津輕海峡、及び、宗谷海峡に入りて、没す。對馬海流、是れなり。寒流は、北の方、オコク海の東北隅に、源を發す。かくて、千島諸島の東邊に沿ひて、流れ、陸中の東岸に到る。千島海流とも、親潮ともいふ。

海流は、人類の生活に、大なる關係あり、那威の西岸、ニールフランドランドの近海、乃至、

區域

畢竟

我が北海道の沿岸などの如き、大なる漁場は、何れも、海流の區域内に在り。土佐の沖に、鯉を生じ、房州の濱に、鰻を産するなども、畢竟、黒潮の影響なり。海流は、又、航海上に裨益あり、北亞米利加より、英吉利に渡る汽船は、墨西哥灣流を利用し、我が國より、北亞米利加に航する汽船は、日本海流を利用す。海流と氣候との關係、また、著大なりとす。例へば、英吉利は、我が千島よりも寒かるへき筈なれど、其の沿岸は、季候、概ね溫和なり。

蓋し、我が千島は、寒流に洗はるゝが故に、寒さ、更にきびしく、彼れは、墨西哥暖流に洗はるるが故に、季候、幾分か和くなり。海流の用の、少小ならざるを見るべし。

# 第六課 大鳴門

瀬戸内海より、外洋に出づるに、三海峡あり、下の關海峡、速吸海峡、鳴門海峡、是れなり。海峡は、他の海面よりも、潮勢はげしきが例なれど、潮汐の干満は、更に、其の流れをして、



激せしむ。鳴門海峡は、殊に、奇觀を呈す。

鳴門海峡は、阿波と淡路との間にあり。

岩礁

幅は、十數町に過ぎざれども、其の間に岩礁多く、中の瀬岩の如きは、其の廣さ、數百歩に餘れり。岩の連續せるあたりは、淺けれども、左右は、急に深くなりて、百仞にも及ぶ。

似

鳴門に二あり、こゝにいへるは、大鳴門にして、小鳴門は、北の方數里に在り。

澳

干潮の時來りて、大洋の潮退き始むれば、いつくともなく、高く、凄く鳴る音して、中の

崩

注

深淵

渦

瀬岩のあたり、潮崩れはしむ。外洋にては、潮、疾く退けども、内海は、退く路狭く、隨うて、退くこと遅ければ、見るく、一方は高く、一方は低く、瞬間にして、水準の差、丈餘に及ぶ。瀬戸内海の水は、こゝより溢れ出づることなれば、其の勢、ひ龍の如く、凄じき限りなし。岩礁の下なる深淵には、一たび落ちたる潮、再び、底より湧きのぼりて、忽ち、一の渦を生ず。落ち来る潮の、益、激しければ、浪狂ひ、水躍りて、わきかへり、先きなるものと、後な

跳  
るものと、合うては碎け、碎けては集まり、寄せ返へし、跳ね返へし、走り旋ること數百回にして、遂に中心凹みを作りて、徑數町にも餘る大なる渦となる。大渦の巻きめぐることに急なれば、其の周圍にもまた夥しき渦を生ず。かくて、大小、無數の渦は、互に、押し合ひ、揉み合ひて、消えては現れ、現れては消え、變幻きはまりなし。

揉  
潮の、愈、退くにつれて、水底の岩礁、益、露れ、崩るゝ浪は、山の如くに落ち來り、大海も拔

奔流  
一條  
け落ちんばかりに、鳴動す。やがて、奔流の餘波は、滔々として、南に下り、海中に、一條の急流を生ず。此の際、舟を、こゝに乗り入るれば、さながら、獨樂の如くめぐり、遂に、弦を離れたる矢の如くなりて、行方を失ふとぞ

第七課 手

目、耳、鼻、口、手、足などは、いづれも、人身に附屬してゐる道具のうちの、甚だ大切なものながら、其のうち、手ほど、効用の廣いものは

なく、また、手ほど、自由自在に、心まかせに使はるゝものはない。

目は、開いてゐる間は、どんないやな物をも見ぬわけにゆかぬ。耳も、塞ぐか、ぬいるか、若しくは、無感覺にならぬ限りは、どの様な不快な物音をも聞かねばならぬ。鼻や舌の働きもまた、其の通りで、持主の心任せにはならぬなかに、只、手のみは、持主の好み次第に働き、目や舌の代理までもつとめる。盲人は、手を、目の代りにして、採りあるき、啜

者は、舌の代りに、手真似をして、其の思ふことを、人に通ずる。

北

診察  
藥劑

人の、あらゆる慾望を實行するものは、手である。ほしいと思ふ花を折るも手、心地よき音楽を奏するも手、字をかくも手、繪をかくも手、鋏を把るも手、裁縫をするも手、器械を動かすも手である。若しも、手が、全く、働きを止めたならば、食物もたべられまい。醫者も、診察に困り、藥劑師も、藥を盛ることが出来まい。

官吏	鋸	鑿
<p>蒸汽機關の發明、顯微鏡の製作、家屋、橋梁の建築、著述、紡織、凡そ人のすること、で、手の力を借らぬものは、殆ど無い。學者も、發明家も、官吏も、實業家も、郵便配達も、皆、手のおかげで、それぐの業を行ふ。工匠は、手に鋸、鍛冶は、手に錘、農夫は、手に鋤、坑夫は、手に鋤、商人は、手に算盤、舟子は、手に櫂、彫刻家は、手に鑿、畫工は、手に筆、軍人は、手に銃、手に何物かを持たずして、働くものは、殆ど無い。</p>		
<p>要するに、人跡に附屬してゐる道具のうち</p>		

*
<p>ちて、手ほど重寶なものはないが、道具である以上は、用ふる人次第で、結果の善惡が生ずる。使用者が惡人なれば、手は、第一に、惡事を助ける。手の所業は、其の持主の品性を表はすものゆゑ、手の使ひかたは、慎まねばならぬ。手についての誠め、一つ。</p>
<p>持つ物は、何であらうと、我が手は、我が全力を傾けて使へ。</p>
<p>第八課 狩野元信</p>

狩野元信は世に古法眼コハクガンと稱せらる。古  
今有數の畫家なり。天性、畫を好みて、はじ  
めは、父正信マサノブに學び、後ちには、周文シュモンを慕ひ、又、  
小栗宗丹コノノリノネに學びき。幼少の頃にすら、人物、  
鳥獸、草木等を畫くことに巧みなりしかば、  
時の人、ほめて、奇童と呼べりき。

十歳にして、將軍足利義政の近侍となり、  
畫を以て、寵せられしが、後年、暇を賜はりて、  
諸國を遍歴し、名ある山水を寫し取りて、京  
に歸る。やがて、擧げられて、畫所預エゾコソアサヘとなり、

遍歴  
寵

叙

※ ※ ※

越前守エチノゾミに任せられ、遂に、法眼に叙せられき。  
元信が畫は、溫雅にして、細密なり。山水、  
人物、鳥獸、花卉、いづれも、妙ならざるなし。  
同じころの畫家中、土佐光信ツサノミチノブは、彩畫に秀で、  
釋雪舟シツシュウは、墨畫に秀でたりしが、元信に至り  
ては、彩、墨の妙を兼ねたり。

或は、光信、雪舟、元信の三人を稱して、本朝  
畫家の三傑といふ。

永正中、元信、數幅を畫きて、明國に送りし  
に、彼の國人、大いに嘆稱し、鄭澤テイタクといふ畫家

の如きは、元信に書を贈りて、我れ若し貴國に遊ぶことを得ば、必ず先生の門に入らんと、いひおこしきといふ。

其の頃、後藤祐乗といふ名高き金工ありき。獅、龍を彫るに、妙を得たりしが、そは皆元信が畫く所に依りて、彫れるなりき。

元信は、筆を執るや、至誠熱心にして、一點一畫をすらも、輕々しくは下さざりき。或時、泉州堺の一國寺にて、一間の襖に、一大樹を描きて、關東へ旅立ちけるが、箱根に到

りて、ふと、其の一枝の、心に叶はざるを想ひいだし、引き返して、描き改めけり。名人の心懸の、如何に深切なるかを思ふべし。

### 第九課 染料

絲類、織物類を染むるには、藍、くちなし、紅草、びんろーじ、あかねの如き、植物性の染料を用ひ、又、アニリン染料の如き、礦物より得たるものをも用ふ。青色の染料は、藍より採るが、通例なり。藍は、草にて、畑に作る。

季候温暖にして、濕氣多き土地に適す。其の産地は、四國の阿波を最とす。

俗に、山藍と稱ふるものあり、又、これを、琉

球藍とも云ふ。此の草にて染めたるは、屢

洗濯するも、色さむることなし。薩摩、総、琉

球上布などは、これを以て、染めたるなり。

赤色には、紅草若しくは茜草を用ひ、黄色

には、うこん、くちなし、刈安等を用ひ、黒色に

は、びんろーじ、かね等を用ふ。八丈絹の黄

色なるは、刈安にて、染めたるなり。

※ ※ ※

鹽 酸  
漂 白 粉

黄と青とを交ふれば、萌黄となり、青と赤とを混ずれば、紫となる。すべて、か様に配合して、種々の染色を作るを得べし。

石炭の黒汁、コールタールより、種々の手

數を経て、アニリンといふ油を得。之れを、

鹽酸に溶かして、漂白粉の溶液を加ふれば、

鮮麗なる紫色の染料を得べし。アニリン

染料とは、是れなり。尚ほ、藥品の利用次第

にて、青、赤等、種々に、色彩を變化せしむべし。

西洋の染物は、主として、これを用ふ。

右の外にも、化學の進歩につれて、種々の新しき染料、工夫せられ、他の製絲業の發達と共に、織物業の進歩を助け、織物業の進歩は、亦た、染色業の進歩を促して、已まず。染料將來の發達は、尚ほ、大いに見るべきものあらん。

### 第十課 領主の新衣(上)

昔或國の領主に着物道樂の殿様があつた。夥しく、着物を仕立てさせて、一日に、幾

度もく、着換へ、氣に入。たのがあれば、それを着て、馬で、城下を乗り廻り、町のものに見せびらかすのを、何よりの樂みとせられた。或時、外國から、二人の不思議な織師が來た。噂によれば、其の織師が、織り出す品は、地質や模様が、類もなく、立派なはいふまでもなく、不思議なことには、愚かな者か、乃至は、心のよこしまな、おのが役目に不忠實な者が見ると、地も模様も、まるで見えぬ、との事。此の靈妙な織物の噂、早くも、領主の耳



＊  
に入り、それは、稀代な。早速、いひつけて、織らせい。との命令。二人の織師は、承て、先づ、原料として、精選の生糸と、純金とを、夥しく、請ひ受け、機織場まで、新たに建て、二臺の大じかけの機械を据ゑて、そこに、閉ぢこもつて、織り始めた。

五六日もたつと、領主は、もう、よほど織れたであらう。様子が、見たいな。と思はれたが、待てよ、常の織物とちがふ。行つて見て、萬一、見えなんたら、領主たる身の大恥辱。ま

づともかくも、誰れかを、やつて、ためさせた上。と、家來の三太夫といふに、言ひつけて、様子を見に遣はされた。

三太夫は、早速、機織場に出張した。二人は、一心に織つてゐる様子なれど、不思議や、機ばかりで、織物は見えぬ。これは、どうぢやとあきれて、挨拶もえせでゐると、織師は、ふりかへり、どうでござります、この模様は、殿様の御氣に入りませうか。といふ。三太夫の目には、その模様とやらが、ちとも見えぬ

が見えぬ、といつては、心のよこしまな不忠者、乃至馬鹿者と思はれては大變、と思ひ、いや、至極結構と、出たらめをいった。

織師は、尚ほも機を指し、こゝの模様がしかぐ、その色合がしかぐ、と自慢して、説明する。三太夫には、何も見えぬと、一々、その言葉だけを覚えて、歸つた。領主は、俟ちかねてゐて、どうぢや、と問はれる。三太夫は、覚えてきた通りを、一々上申した。

領主は、かうなると、毎日、待ち遠でな

らぬ。そこで、取りかへ引きかへ、近侍の者を、様子見に遣はされる。誰れの目にも、織物は見えぬ。しかし、見えぬといつては、愚人又は不忠者と見做される恐れがある故、いづれも、見えるふりで、織師の説明を聞いて歸つて、そのまゝを上申する。

とかくするうち、織物出来たとのことで、織師は、殿の着丈まで伺つて、仕立て上げ、吉日を選んで、いよく上納といふ運びになった。

## 第十一課 領主の新衣下

その日は、家臣一同、残らず、大廣間に出仕して、左右に居列び、領主は、正座に、威儀を正して座られた。やがて、織師は、白木の臺を、恭しく捧げて、御前に据ゑた。畏れながら、お詔への召物、即ち、これに、といて、頻りに、開き展べる躰をするが、殿の目にも、誰れの目にも、何にも見えぬ。就中、殿は、きょとせられた。考へて見れば、領主たる職務を盡さなんだこともある。多少、不信實なことをし

展 詔 捧 奉

米 米 鶴



た覚えもある。そのせいで見えぬ、と思ったが、態と、さあらぬ躰で、見事く、御苦勞であつた、といはれた。

やがて、ともかくも、御着用といふ事になって、これが御襦袢、これが御下着、これが御上着、と、織師は、一々、殿に着せかけたが、不思議や、殿の目にも、家臣の目にも、

やはり、何も見えぬ。家臣のうちには、奇怪なこと、と思ふものもある。だが、見えぬといつては、不忠ものとならうゆゑ、御見事く、よく似合ひます。と、口々にほめる。皆がほめる故、どうやら、裸身の様な氣持はすれど、殿も、とうく釣りこまれ、立派に着飾。たゞ見になり、幸ひ、その日は、大祭日ゆゑ、この新禮服にて、市内を巡行しよう、と申し出だされ、織師どもには、莫大な賞金を與へられた。市内でも、とうから、この禮服の評判が高

裸身

悪人

加減

かつた故、どんな立派な召物であらうかと、通り筋には、市内の男女が、黒山の様に集つて、行列を待ちうけた。やゝあつて、領主は、馬上で、家臣數十人つれて、しづくくと、ねってゆく。しかし、誰の目にも、立派な禮服は見えぬ。さては、我くは、悪人ゆゑに見えぬか、と思ふ老人もあれば、おれが悪人ゆゑぢや、と、ひそかに恥ぢてゐるものもある。だが、誰れも誰れも、口に出して、見えぬ、とはいひ得ぬ。お見事ぢや、立派ぢや、珍らしい。と、よい加減の

事をいってゐた。

そのうちに、子供等が、かけてきた。この行列を見るとそのまゝ、やゝをかしいく。殿様が裸で、馬にのつてゐる。をかしいな、をかしいな。と、聲を揃へ、手をたゝいて、さわいだ。此の無邪氣の一言に、數萬の市民が、始めて、我れにかへつて、いかにも裸だ。丸裸だ。といふ聲が、だんく、だんく、に高くなつて、遂に、數萬人が、一時に、どと、ふき出した。

殿も、家臣も、今更には、と心づき、さては、

織師の惡者にだまされたのではないかと、急ぎ、館へはせ歸つて、織師を呼び出せ。とのゝした。が、もう遅い。惡者の織師は、とうに逃げ去つて、影もなかつた。

第十二課 羽衣

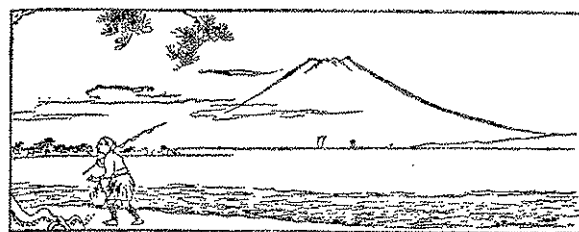
駿河なる

三保の浦への朝ぼらけ、

目もはるかなる景色かな。

我れは、此のあたりに住む白龍

衣 裳 薫



といふ漁夫なるが、聞きなれ  
ざる音楽聞こえ、花ふり、香氣  
薫ずるゆゑ、只事ならじと思  
ふところ、見れば、これなる松  
の枝に、世にも稀れなる衣裳  
かゝれり。其の色、美しく、珍  
らしく、人間の着る物ならず。  
持ち歸りて、家の寶とせんと  
思ふ。

天女、のうく、その衣は、我が

物ぞ。返したまへ、のう。

漁夫、いやく、これは、捨て、

ありしものなり。拾ひたる  
上からは、我が物なり。

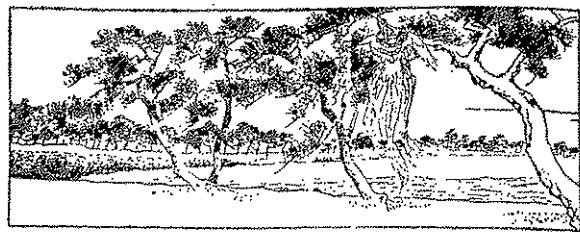
天女、それこそは、天人の着る

羽衣とて、人間の持つものな  
らず。速かに返したまへ。

漁夫、さあらば、いよく貴き

品なり。とゞめて、國の寶と  
もせん。返すことは、叶ひが

※ ※ ※ ※ ※



墮落



たし。

天女、かなしやな。

その羽衣をうしなへば、

天にかへらん翼なし。

地に留まれば、墮落のところが。

あら、何とせん。悲しやな。

龍夫、あな、痛はし。さほどに

歎きたまふならば、衣は返し

まゐらすべし。

天女、うれしや。返したまは

ん、とや。

龍夫、いかにも。羽衣をば返

しまゐらせんほどに、報いに

は、舞を舞うて、見せたまへや。

天女、あな、うれしや。さては、

天上に歸らるゝよ。舞、舞ふ

は、易きことぞ。まづ、羽衣を

返したまへ。

龍夫、いやく。衣を返さば、

舞は舞はで、そのまゝ、天に上

りたまはん。

天のう、疑ひは、人間にこそあれ、天に  
は、偽りはなきものを。

後天、あら恥かし。げにも、とて、

衣を返し與ふれば、

天女は、羽衣着しつゝ、

うち振るや、

天つをとめの舞の袖。

たへなる聲のあづま歌。

君が代は、天の羽衣まれにきて、

※

※ 偽

巖

鼓

※ 颯々

霞

撫つともつきぬ巖なるらん。

巖なるらん。とうたひつゝ、

はや、舞ひ昇る松の枝。

うつは、鼓か、波の音、

濱の松風音そへて、

颯々たりけり、衣のすそ、

もすその末は、朝がすみ、

浮島が雲や、富士の高根、

かすかになりて、天女のすがた、

霞にまぎれて、うせにけり。



第十三課

曲亭馬琴 キョクテイバキョウ

曲亭馬琴は、徳川時代の名高き小説家に  
して、姓は瀧澤、名は解トキといへり。明和四年、  
江戸に生れき。

幼きより、讀書を好み、常に小説類を喜び  
て、晝夜、卷を放たざりしが、長ずるに及びて、  
時の小説家山東京傳ヤマトキウデンの門に入りて、著作を  
試み、一時は、書肆の番頭ともなれりき。身  
の丈六尺餘ありて、容貌魁偉なりしかば、或

書肆

※

※

履物  
入婿

は、力士になれ、と勸むる者もありしが、馬琴  
之れに答へて、角力は、人のもてあそびのみ。  
男たらん者は、宜しく、人を動かすべし、人に  
弄ばるべけんや。とて、従はざりき。

三十七歳の時、飯田町中坂なる、或履物商  
の家に、入婿となりけるが、かゝる業を快し  
とせざりしかば、幾程もなく廢業し、書を兒  
童に教ふる傍ら、小説類の著作に従ひけり。  
然るに、作意拔群にして、文章また巧妙なり  
しかば、世人、争うて、其の著を愛讀し、馬琴の

廣

文

馬琴先生遺稿

三十一

一 富山月鏡片

名は忽ちにして、海内に震ひぬ。

馬琴は、六十五歳の頃より、右眼の明を失ひぬ。積年、讀書と著作との爲めに、甚しく、目を使ひし結果なりき。かくて、七十歳前後よりは、左の眼もまた、曇りがちになりしが、尚ほ、暫くも筆を措かざりき。其のころの原稿を見るに、書きたる上に、また書きて、

原稿 措 曇



文字の形、さだかならぬが多し。七十四歳以後は、兩眼、全く盲ひしかば、其の子の寡婦に口授して、文章を筆記せしめき。

馬琴が、一代に作りたる書は、二百五十餘種に及べり。就中、里見八犬傳、弓張月、朝夷、巡島記など、最も名高し。殊に、八犬傳は、其の全力を盡したる大著述にて、前後二十八年の歳月を費しきといふ。

馬琴は、嘉永元年、年八十二にて死にき。

第十四課 短篇一束

謙信

むかし、甲斐の武田信玄、越後の上杉謙信と、兵を構ふること、十餘年に及びけり。甲斐は、山國ゆゑ、鹽を、相模に仰ぎゐたるに、信玄の敵今川氏真、信玄を苦めんと欲し、相模の領主北條氏康と謀りて、鹽を送ることを止めき。謙信、之れを聞きて、書を、信玄に送りて、曰はく、氏康等の所爲、卑怯の至りなり。我れ、足下と戦へども、争は、武にありて、鹽に

卑怯

\*

あらず。我が國、鹽に豊かなり。いくらにても、求めたまへ。送らしめん。とて、商人に命じ、價を廉にして、賣らしめけり。

傳書鳩

鳩ハ、舊巢ヲ、深ク愛ス。數十里ノ遠キニ行クモ、必ズ、舊巢ニ歸ルヲ常トス。獨佛戰争ノ際、巴里ハ、重圍ノ中ニアリシガ、鳩ヲ利用シテ、信書ヲ往復セシメキ。圍ミ解クルニ至ルマデニ、鳩ガ、城内ニ送達セシ公私ノ信書、無慮百十五萬ニ及ビキ、トイフ。現今

歐米諸國ニテハ、通信用ニ、鳩ヲ飼養スルコト行ハル。傳書鳩トハ、是レナリ。

### ダムく彈丸

普通の小彈丸の尖頭に、硬質の外皮あり。それを削り去りて、發射すれば、穿透力は減ずれど、軟質の鉛、迸出するが故に、命中するときは、廣さ三四寸の重傷を生ず。これを、ダムく彈丸といふ。英國兵が、印度の土蕃を征せし時、偶然に發明せしものなり、といふ。殘酷なる傷害を、人に與ふるものゆ

既誌

※

※

ゑ、爆藥裝填の小銃彈と共に、萬國會議にて、今は、其の使用を禁じたり。

### 第十五課 火山

地球の殻に、裂け目ありて、そこより、水蒸氣を噴き出だし、岩の碎けたるを飛ばし、或は、岩の鎔けたるを流し出だすことあり。かゝる活動の爲めに生じたる噴出物の、集りて、うづ高くなれるものを、火山と稱す。

圓錐狀摺鉢

火山の形は、大抵、圓錐狀をなす、恰も、摺鉢

賣

ト

高橋斗上走月卷二

三十四

高橋斗上走月卷二

湛

を、倒に伏せたるが如し。其の頂は、中央、深く凹み、四邊は、峯にて圍まれ、譬へば、漏斗の如き形をなすを例とす、之れを、噴火口と云ふ。噴火口の跡は、間、水を湛へて、湖をなす山頂、乃至、山腹にある湖は、概ね、此の類に屬す。上野、榛名の湖、陸奥、恐山の湖の如き、是れなり。現に噴火するものを、活火山と云ひ、むかし噴火して、今は活動を止めたるを、死火山と云ふ。我が國は、頗る、火山に富めり、全國にて、一千餘座あり。

\*

熄止

火山のある地には、地の裂け目多く、隨うて、地震多し。我が國の如きは、平均、一日に一回づゝの地震ある割合なり、とぞ。温泉も亦た、火山脈に伴ふものなり。我が國の活火山の、著きものは、肥後の阿蘇山、伊豆の三原山、信濃の淺間山、渡島の駒ヶ嶽などなり。飛驒の乗鞍嶽、相模の箱根山、陸奥の十和田山等は、死火山の著名なるものなり。

或は、一時熄止せるも、時々噴出して、水蒸

賣

本

島等斗主走月卷二

三十五

富士山 号 或 反

※

埋没



氣を吐き、鎔岩を流し、大害を、  
 四圍に及ぼすものあり、岩代  
 の磐梯山の如き、其の例なり。  
 富士山の如きも、寶永の頃、突  
 然噴火し、降灰、足柄山附近を  
 填めきといふ。寶永山は、其  
 の際噴出せしものなり。  
 火山の爆裂は、甚だ恐るべ  
 し。其の激烈なるや、田畑、人  
 家を埋没して、影を留めず、繁

華の地、忽然として、荒野と變ず。

天明三年、信濃淺間山爆裂せしや、上野、下  
 野は勿論、常陸、上總、下總、安房、武藏の諸國、一  
 面に、灰降り、鳴動、伊勢、近江に及びき、といふ。  
 近くは、明治二十一年、磐梯山の破裂の如き、  
 灰を降らすこと、百八十餘方里に及びき。

西洋紀元七十九年、伊太利のベシユーピア  
 ス山の大破裂には、強雨、灰砂に混じて降り、  
 晝も、夜の如く暗黒となり、ヘルキユレネアム  
 の市と、ボンペーの市とは、悉く、噴出物のた

混

賣

本

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

三六

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

めに埋められき。

第十六課 霧島山

霧島山は、又、高千穂峰ともいふ。火山に  
屬す。日向、大隅の國境にあり。昔、皇孫瓊  
瓊杵尊、こゝに降臨したまひき、と言ひ傳ふ。  
麓には、雜木生ひ茂りたれども、登ること  
五十町ばかりにして、樹木絶え、芝の如き草  
のみ生ひたり。そこより望めば、四方濶然  
として、薩摩、大隅、日向の三國、一目に見渡さ

芝



され、群山浪の如く、遙か  
なる海は、青疊を敷きた  
る如し。櫻島山は、突兀  
として、盆石の如く、絶頂  
より、白き煙の立ち昇る  
様、香爐に似たり。

草ばかりなる山腹を、  
五十町も登れば、路はい  
よく、嶮しく、草さへも  
絶えて、栗ほどの焼石、累

累たり。而して、不時に、下より、雨そゝぎ、風  
横ざまに吹き來る。こは、かゝる高山には  
ありがちの例なり。

更に登ること二十町餘路、一層嶮惡となり、左右の谷深く、物凄く、殆ど馬の脊を踏み渡る思ひあり。故に、この邊を名づけて、馬の脊越といふ。一步ごとに、焼石、音をたて、左右の谷へなだれ落つ。右の谷は、雲立ち蔽ひて、底へは、眼も及ばず。左の谷は、噴火口なれば、黒烟渦を巻きて、わきのほり、遠

雷の如き地下の鳴動、物凄く、怖ろし。

絶頂は、此處より八町餘なり。そこに、天  
の逆鋒サカゴと稱せられたるもの立てり。青銅  
製にて、長さ一丈ほどあり、といふ。

第十七課 五帶と生物

地球の表面は、太陽熱を受くる度の強弱に基きて、五部に分かたる。赤道の南北、二十一度半の間は、太陽の光線直射するが故に、熱し。これを、熱帯と名づく。それより、



南北ともに、四十三度の間は、太陽、やゝ斜に照らすが故に、氣候溫和なり。この處を、溫帶と名づく。南北共に、極端となれる處は、光線、最も斜に照らすが故に、寒冷なり。この地方を、寒帶と云ふ。溫帶、寒帶、南北合せて、四帶あり。之れに、熱帶を加へて、五帶と稱す。

地球上の生物は、其の棲息地と共に異なるを例とす。例へば、赤道地方の植物は、概ね、生長盛んにして、棕櫚、芭蕉、椰子樹等繁茂

※ ※ ※

せり。動物は、體格偉大、被毛鮮麗にして、又猛烈なるが多し。溫帶地方に入れば、植物は、ぶな、なら、樺、松、杉の類多く、動物は、鼠鼯、狐、狼、熊の類多く、鳥類には、鳴禽多し。さて寒帶に入れば、植物には、樺、樅、黃楊、柳の類多く、漸く北するに隨ひ、蘚苔類のみとなり、動物には、白熊、膾肭獸等の類住し、いよく、極に達すれば、全く、動植物の影を絶つに至る。

要するに、地球上の生物は、赤道直下に、最も榮え、兩極に近づくにつれて、衰ふ。蓋し、

生物の分布に與つて、最も力あるは、溫度なり。生物は、之れに由りて、榮枯し、消長す。

我が國の版圖は、細く、長く、南は、臺灣より、北は、千島に至る。一端は、熱帶に入り、一端は、寒帶に近づけり。故に、國內の寒暖、相異なること甚だし。隨うて、種々の動植物を含めり。

臺灣には、毒蛇、豹、の外、熱帶地方に産する鳥類、昆蟲類など種々あり。北海道には、白熊、臘肭獸などあり、西伯利亞地方の産に類

養殖

す。内地には、猪、猿、狐、鷹、鳶等、普通の動物は、具はれり。植物も、よく蕃殖す。臺灣、小笠原島、琉球



には、蘇鐵、棕櫚、芭蕉等、十分に生長す、殆ど、純然たる熱帶地方に異なることなし。九州、四國、及び本州には、ひば、落葉松、ぶな等を生ず。さて、北海道に入れば、殆ど、寒帶地方に等しく、とら松、とが等繁茂し、竹は、生育せざるに至る。要するに、我が國は、殊に、植物の種類に富めるを以て、名あり。

人類も亦た、動植物に等しく、氣候、及び、其の他の事情によりて、消長す。例へば、熱帶地方の民は、衣食に、身心を勞せざる故、蓄産

\*

情弱

の念に乏しけれど、溫帶より、寒帶に漸進すれば、衣食を得る道、漸く、困難となる。隨うて、熱國の民には、情弱なるもの多く、寒國の民には、堅忍の資あるもの多きを常とす。

### 第十八課 奇異なる植物

印度、布哇などの、熱帶地方に繁茂せるバンヤンの木といふは、奇なる植物なり。高さ數十尺もある幹や、枝より、根生ひ出でて、漸次に、地に垂下し、やがて、地中に入りて、生

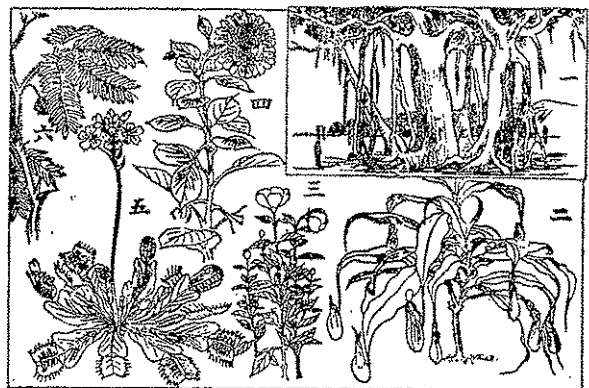
え着く。其の様、さながら、柱を樹て、枝を支へたるが如し。年を経て、老木となるものは、凡そ一千人位を、樹下に憩はしむるに足るといふ。

我が國の植物中にも、間、奇なるものあり。月見草は、月に向うて、花を開き、日出つれば凋む。向日葵は、其の名の如く、太陽に向うて、咲き、且つ、其の光を追うて、廻る。また、ねむり草といふあり、外物來つて、葉に觸るれば、葉の兩片、直ちに相抱き、且つ、莖より折れて、垂

一、ノナツ本  
二、ノナツ本  
三、ノナツ本  
四、ノナツ本  
五、ノナツ本  
六、ノナツ本

扁平

下す。ねむの木は、夕べに至れば、あらゆる枝々の葉ども、各、相抱きて、眠るが如くなる。甚しきに至りては、動物かと思はるゝ植物あり。蠅地獄と云ふは、北米カリナ州に、多く産す。其の葉は、扁平にして、長き葉



中肋

柄を有し、葉面の中肋に、兩半、各三個づゝの硬毛を具へ、葉縁に、亦た、あまたの刺毛を具ふ。蟲類などの來りて、觸るゝ時は、左右より、包み、葉縁の刺毛、一時に突起して、交錯し、容易く、蟲類を閉鎖し、且つ、中肋の硬毛にて、之れを刺し、多量の毒液を分泌して、漸次に消化し、終に、吸収し了る。

ウツボカツラは、多く、印度地方の熱帶に産す。其の葉狹長にして、其の先端に、瓶の如きものを具ふ。瓶の上部には、蓋あり。

交錯

其の内部は滑かにして、蠟に似たるものに塗られ、且つ、其の底に、液汁を蓄へ、而して、其の口及び蓋の邊よりは、甘き汁を分泌す。されば、蟲類などは、誘はれて近づき、誤て、底の液中にすべり入る。然るに、内部滑かなれば、再び出づる能はず、遂に、消化せられ、吸収せられ了る。

此等をば、食蟲植物と稱す。我が國の狸藻、毛氈苔などは、此の類なり。

# 第十九課 輕氣球

風船玉ノ、空高ク舞ヒ上ルヲ見タリヤ。

如何ナレバ、割合ニ重キモノヲ提ゲナガラ、  
アノ如ク、漂々トシテ舞ヒ上ルカ。他ナシ、  
内ニ、空氣ヨリモハルカニ輕キ水素瓦斯ヲ  
含ミ居レバナリ。

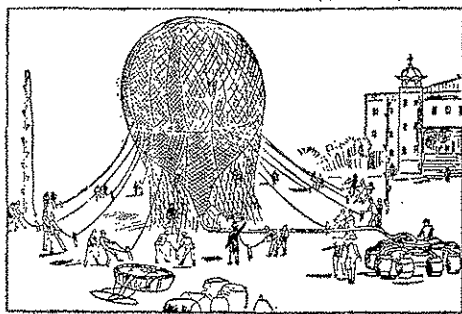
試ニ、普通ノ風船玉ヨリハ、數千萬倍モ大  
ナル囊ヲ作リタリ、ト想ヘ。而シテ、コレニ、  
十分、水素瓦斯ヲ充タシタリ、ト想ヘ。其ノ  
大ナル風船玉ハ、前ノト同ジ道理ニテ、ソノ

綴  
密  
膠

大サニ相應シタルダケノ  
重キ物ヲ提ゲツ、舞ヒ昇  
ルベシ。輕氣球ノ理モ亦  
タ、之レニ外ナラズ。

輕氣球ハ、絹布ニテ作り  
タル球形ノ大囊ナリ。之

レニ、膠、ゴムノ類ヲ塗リテ、  
質ヲ緻密ニシ、サテ、水素瓦  
斯若シクハ石炭瓦斯ヲ充滿セシムルナリ。  
サテ、球ニハ、繩網ヲ被ラセ、其ノ下端ノタガ



藍

※※

ヨリハ、數十條ノ綱ヲ垂レ、之レニ、藤、蔓、製ノ  
 籃ヲ懸ク。 籃ハ、人ノ乗ル爲メニシテ、中ニ  
 ハ、晴雨計、寒暖計、望遠鏡、羅針盤、及ビ、數多ノ  
 砂囊ナドヲ備フ。 マタ、球ノ側ニハ、大ナル  
 傘ヲ懸ケテ、降下ノ便ニ供ス。

※

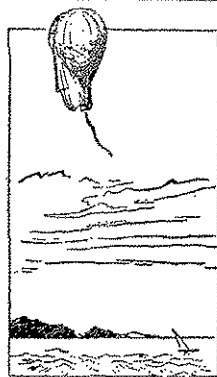
籃中ノ準備、全ク整ヘバ、瓦斯ヲ、囊ニ充タ  
 ス。 瓦斯充ツレバ、球ハ、見ル、空高ク昇  
 ル。 球中ヨリ、下界ヲ見下セバ、高山モ、蟻ノ  
 塔ニ等シク、大河モ、白キ紐ノ如ク、市街、村落  
 ナドハ、殆ド、斑々タル黑點ト見ユ。 更ニ、高

勝驪  
丘陵

※

ク昇ルトキハ、下界ハ、朦朧トシテ、山河モ、丘  
 陵モ、沼池モ、市街、村落モ、見ワケ難シ。 曇レ  
 ル日ト雖モ、一タビ、雲際ヲ超ユル時ハ、太陽  
 キラ、ト照リ渡リテ、雲ノ峯ノ千態萬狀、

殆ド名狀スベカラズ。



サテ、愈、昇レバ、空氣  
 愈、稀薄トナリテ、呼吸切  
 迫シ、寒氣甚シク、手足ハ

凍エ縮ム。 瓦斯ハ、大イニ膨張シテ、囊ハ、殆  
 ド破裂セントス。 ソノ時、綱ヲ引キテ、開閉

逸

微塵

辦トイフヲ開キ、囊中ノ瓦斯ヲ逸出セシム。降ラントスル時モ亦タ、カクノ如クス。更ニ昇ラントスル時ハ、砂囊ヨリ、砂ヲ覆スナリ。一步誤レバ、下界ニ落チテ、微塵トナル。恐レアル代リニ、其ノ眺望ノ珍シサ、面白サモ、譬ヘンニ物ナシ。

輕氣球ハ、西曆一千七百八十三年、佛人ノ發明ニ係ル、トイフ。當初ハ、紙ニテ、囊ヲ作リ、之レニ、暖メタル空氣ヲ充タシテ、昇ラシメシガ、間モナク、水素ヲ用ヒ、遂ニ、石炭瓦斯

施

※

ヲ用フルコト、ナリ、兼ネテ、種々ノ改善ヲ施スニ至リキ。

輕氣球ハ、軍事ニモ用ヒラレ、氣象觀測ニモ用ヒラル。獨佛戰爭ノ際、佛軍ハ、通信ノ爲メニ、數十ノ輕氣球ヲ放チテ、數萬通ノ書信ヲ郵送シキ。其ノ中、數個ハ、目的ヲ達スル能ハザリシカド、大抵ハ、安全ニ、身方ノ陣地ニ歸リキ、トゾ。

特筆

氣象觀測ニハ、屢、用ヒラレタリ。ソノ特筆スベキハ、發明後、間モナク、佛ノ有名ナル



二人ノ學者ガ、高層ノ空氣ニ就キテ、種々ノ有益ナル觀察ト研究トヲナシ、コトナリ。

### 第二十課 少年鼓手(上)

十九世紀の初め、ナポレオンが、兵を進めて、伊太利に攻め入った時分、其の一枝隊は、マクドナル將軍が率ゐて、有名なアルプス山を超えた。

アルプス山は、世界第一の峻山であるのに、冬の半ばゆゑ、山は、悉く、雪に埋められ、吹

峻山

\*

旁

牽

\*

竿

きおろす山風は、真に、肌を劈く様であつた。さらぬだに、糧と眠りの足らぬ爲めに、疲れはてた兵士等が、重い大砲を、馬に牽かせて、雪や氷にすべりく、此の山を登る艱難は、實に、甚しいことであつた。

此の隊中に、十三四の少年鼓手がゐた。

けなげにも、他の兵士等に立ち交つて、太鼓を叩きつゝ、進んで行く。少しも、屈した色は見えぬ。列のま、さきに立つて、竿で、雪の深さを量りく、進んで行く。一武官があつたが、を

りく、此の少年鼓手を顧みて、その勇氣を稱賛した。此の武官こそは、突貫將軍とあだ名せられて、全軍の兵士に尊敬せらるゝマクドナル將軍であつた。

さるほどに、遙か向うの眞白な山の頂に當つて、凄まじいもの音が聞こえ始めた、やがて、次第に激しくなり、終には、百雷の、一時に落ちかゝる様な響となった。これと同時に、それ、雪崩だく。と叫ぶ聲が聞こえた。すは、大變だ、逃げろく。といふ間もなく、塊と

※

いふよりは、山ともいふべき、雪のくづれが、ぐらぐらと、なだれ來つて、隊列のまん中を衝きぬいて、遙かの谷底へ落ちていった。しばしは、四面朦々朧々として、一二尺前すらも、辨ずることが出来なかつた。

無  
慚

無慚や、この雪崩の爲めに、幾十人といふ兵士が、谷底へ掃き墮されたばかりか、かの勇ましい少年鼓手の姿までも、見えなくなった。兵士等は、軍中の花をとられた心地して、一同に、聲を揃へて、ビールよ、少年鼓手よ。と呼

んだが、返辭はなく、雪なだれ過ぎての、しんくたる山中に、只、遠く、龍の音が聞こえるばかりであった。

第二十一課 少年鼓手下

や、暫くたつうちに、其の龍の音の外に、何處ともなく、太鼓の音が聞こえた。耳をたて、聞けば、進軍の調べが響く。疑ひもなく、ビールが調べる、いつもの太鼓に相違ない。さては、まだ生きてゐるのである。あ

\*

物

の太鼓は、居所の知らせ。あの勇少年を見殺しにするに忍びぬ。如何にもして、助けたい。何か工夫はあるまいかと、兵士等は、切りに、氣をもんだ。

なれども、深さ幾百丈とも知れぬ谷底、其の上に、雪や氷に鎖されてゐるゆゑ、下りゆく便りも無い。そのうちに、打ち鳴らす太鼓の音は、だんく、低く、微かになる。ぐづぐづしてゐたら、ビールは、凍えて死ぬであらう。兵士等は、氣をあせるのみで、工夫が

疎

賣

つかぬ。

この時、がけ際に突立って、誰れといふより、おれが下って、救はう。と叫んだ人があるから、驚いて、眼を注げば、思ひがけない、其の人は、將軍マクドナルであった。手早く、外套を脱ぎ、すぐにも、谷へ下らうとするので、兵士等は、あわて、異口同音に、將軍の一命は、我れくとも千人の命よりも尊い。ビールは、我れくともにお任せなされて、まゝ、お止まりなされませ。と言って

外  
套

切りに引き止めたが、將軍はきかぬ。

兵士は、皆、おれが子も同然である。父でありながら、其の子を救ふ爲め、命を惜む筈がない。早く、大砲の綱を解いて、おれが體にくゝりつけて、おれをおろせ、もう、片時も猶豫してゐるときでない。ビールが死んでしまふは、と、叱る様にいふゆゑ、兵士は、據なく、將軍を、谷底へおろした。

冒

將軍は、辛うじて、谷底へおりて、危きを冒して、傳ひあるき、彼方此方を索めたけれど

賣

文

馬車斗を月と

五

言ひ、言ひ、言ひ、

もしんかんとして、もう太鼓の音も聞こえぬ。聲を限りに、ビールよく。と呼び立てつゝ、やうくの事で、殆ど絶息せんとしてゐるのを探してあてた。手早く、上帯の一つ



を解いて、ビールの體を、自分の體に括りつけて、合圖すると、兵士等、力を

括

合せて、二人を上へ、引き上げた。

勇敢にして、慈悲深き將軍のおかげで、軍中の花は、ともかくも、生きて、還り來たので、全軍、一齊に、歡喜の聲をあげた、アルプスの山も震ふばかりに。

少年が、全く、我れに復た時に、將軍は、其の手を握て、我れくは、生死を共にし來たのであるが、尚ほ、此の後ちとも、此の心を違へまいぞ、と誓った。

後年、戦争終り、世の中、太平になり、將軍マ

\*

クドナールは、南佛蘭西の静かな田舎に退隠して、老後を送ることゝなつたが、その頃、將軍に近侍して、日々、忠勤を盡した、立派な丈夫は、この時の鼓手ビールであつた。

## 第二十二課 日 射

夜、燈火を點ずるは、何の爲めぞ。暗中には、物を視る能はざればなり。太陽は、大なる燈に比すべし。太陽なくば、世界は闇となり、眼あるも、用をなさじ。晝物を視る

\* 紫 \*

を得るは、太陽の光あればなり。

色を見別くるも、太陽の光線作用に基く。赤、青、黄、紫などいふ物の色は、其の物體の面を照らしたる太陽の光線が、更に反射して、目に入りたるを指すに外ならず。物體には、固有の色なけれど、太陽の光線を受くるに及びて、始めて、さまざまの色を生ずるなり。

太陽は、光を放ちて、世界を照らすのみならず、また、熱をも與ふ。空氣の溫暖らるゝ

摩擦

も、地面の温めらるゝも、皆、太陽の熱を受くるに由るなり。薪、石炭などの燃えて、熱を發するも、久しく、太陽の熱を吸収したる故なり。

※

氷の解けて、水となるも、太陽熱の作用なり。水の蒸發して、雲となるも、太陽熱の作用なり。風の起ることも亦、空氣が、太陽熱の爲めに温めらるゝより生ずる變動たるに外ならず。

※

毒菌

病の因となる毒菌は、多く、濕氣ある處に

死滅

※

蕃殖す。最も恐るべきバクテリアだにも、太陽の光熱にあへば、たやすく死滅するなり。日あたりよき空氣中に、傳染病毒の存せざるは、是れが爲めなり。

濕氣

陰鬱

※

太陽の光と熱と無くば、地球上の萬物、一として、生育すること能はざるべく、雨ふることともなかるべく、風の起ることともなかるべく、世界は、如何に冷き、暗き、濕氣深き、陰鬱なるものとなるべきぞ。太陽の光と熱とを併せて、日射といふ。

賣

本

『新編』新編『新編』

五十三

『新編』新編『新編』

## 第二十三課

## 新羅三郎

霞たな引く小松原、さゝ波  
 よする近江路を、征討軍に加  
 はらんと、新羅三郎義光が、  
 駒走らする後ろより、みゑび  
 やかなる武者一騎、豊原時秋  
 追ひすがり、我れも、共に、と、從  
 軍し、美濃路、尾張路、三河路と、  
 日數重ねて、相模なる 足柄山



＊ ＊ ＊ ＊ ＊

＊

巧妙

＊



につきにけり。

頃しも、彌生半ばにて、櫻に  
 かゝる月影の、朧に霞む春の  
 空、鬼神も、心や和らがん。

文武の道を兼ねそなへ、笙  
 吹くことに巧妙の、義光、此の  
 時思ふ様、我れは、軍に臨む身  
 の、生死の程もはかられず、  
 世に、たぐひなき、靈妙の、笙の  
 秘曲の、このまゝに、世に傳は



斯

らで亡びんは、斯の道の爲めに惜むべし。  
よし、時秋に傳へんと、主従、岩が根に、座  
を構へ、傳授の秘密盡しつゝ、月下に吹  
くや、笙の笛。満山、寂と静まりて、澄み上  
りたる笛の聲、岩間清水か、松風か、妙音、  
天地に溢れけり。

溢

※

義光、やをら吹き了へて、秘傳、具さに授  
けはて、いでや、時秋、道の爲め、はやく、  
都に歸れよと、いひつゝ、立てば、驚きて、  
尚ほ、從軍を願へども、思ひ定めしものゝ

※

磐石

ふが、動かぬ心は、磐石の、重さは劣らぬ  
文と武や、行くは武の道、引き返す、文藝  
の道も尊しと、なごり惜しさを忍びつゝ、  
西と東へ別れゆく。

第二十四課

驚宿梅

むかし、村上天皇の御時、天皇が、多年御秘  
藏の紅梅が枯れたので、深く惜ませられ、速  
かに、此の紅梅に劣らぬ木をさがし求めて  
參れと、廷臣某に、詔があった。

詔

※

※



一本の紅梅が、今を盛りと咲いてゐる。枯  
某はかしこまって、あまね  
く、都中をさがしたが、然る  
べき木が見當らぬ。或日、  
尋ねあぐんで、或場末へ來  
ると、折しも、吹きくる春風  
につれて、梅の花の薫りが  
した。若しやと、尋ね寄つて  
見ると、竹垣の新しい、小ざ  
ばりとした板屋の庭に、只

れた、宮中のにも優るほどの名木と見えた  
から、喜んで、家内へ聲かけ、勅命ゆゑ、この木  
をもち行くぞよ。とて、すぐ、人夫に差圖して、  
掘り取らせた。

この家の主人は、歌人紀貫之の女で、幼け  
れど、伶俐な娘であつた。某が、梅を掘り取ら  
せるを、椽先で見てゐたが、いよく、持つて行  
かうとするとき、色紙に、何ごとか書いて、そ  
の梅の枝につけさせた。

某は立ち歸つて、紅梅を求め得た由を奏聞

色紙

すると、天皇は、斜ならぬ御悦びで、端近く出でさせられ、その梅を御覧あるうち、ふと、色紙に、御目がとまり、取りあげて、讀ませられると、

勅なれば、いともかしこし。鶯の、

宿は、と問はゞ、いかに答へん。

とあった。帝の御望みとあれば、奉るは厭はねど、あとで、いつもの鶯が来て、わしが宿はと問うたら、何と答へませう、かはゆさうなといふ優しいこゝろの歌であった。

天皇は、暫く、無言でいらせられたが、やがて、その家の主人は、何人ぞ。と問はせられた。紀貫之が幼女でござりまする。と答へると、さてく、心なきわざを致した。とおほせられて、恐れ多くも、梅は、すぐに、もとの貫之がやどに返させらるゝこととなった。

後に、召し出だされて、女官となり、紅梅の内侍と呼ばれたは、此の少女のことであった。

# 國語讀本 高等小學校用 卷六

明治三十三年 九月廿九日印

明治三十三年 十月一日發

明治三十三年十二月廿三日訂正再版印刷

明治三十三年十二月廿六日訂正再版發行

刷 (國語讀本 高等小學校用)

卷ノ一 定價 金拾八錢	卷ノ五 定價 金廿二錢
卷ノ二 定價 金拾八錢	卷ノ六 定價 金廿三錢
卷ノ三 定價 金貳拾錢	卷ノ七 定價 金廿三錢
卷ノ四 定價 金廿二錢	卷ノ八 定價 金廿四錢

著 作 者 坪 内 雄 藏

東京市神田區裏神保町九番地  
合資 富 山 房

合資會社富山房社長  
坂 本 嘉 治 馬

東京日本橋區樂新堀町三十三番地  
仁 科 衛

同 所 厚 信 舍



發 兌 元

發 行 者  
代 表 者  
印 刷 者  
印 刷 所

(明治三十三年九月廿九日)  
長距離(電話)會社 富 山 房  
加入(電話)本局 電話 號碼 ヤマ7

